

メルロ=ポンティのソシユール解釈再考

——〈社会的なもの〉としての言語——

佐 野 泰 之

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本論では、メルロ=ポンティの中期言語論のメルクマールと言われる「ソシユール言語学の受容」という出来事を、彼が「社会的なもの」について行っていた議論を背景に再解釈することで、メルロ=ポンティの言語論及び彼のソシユール解釈についての理解に新たな光を投じることが目指された。まず我々は言語を「社会的なもの (le social)」の一特殊例とみなすというメルロ=ポンティの中期思想を貫く問題意識に着目した（第一章）。そこにおいて彼は、社会的なものをデュルケームが述べたような「物」や「集合意識」ではなく「間主観性」とみなし、社会的なものを徹底して個人によって具体的に生きられた様相において記述するという立場をとっている。次に我々は、言語と社会についてのメルロ=ポンティの考えを突き合わせることで、ソシユール受容の背景にあったメルロ=ポンティ独自の言語観を浮き彫りにし、それが彼のソシユール理解に及ぼした影響を考察した（第二章）。彼の言語論の枠組みにおいては、ラングは——社会的なものがその個人的具現という次元から捉えられていたのと同様に——語の主体が世界や状況に対してとる態度と入り交じったものとして捉えられ、意味の伝達は話し手と聞き手が共有する既知のコードに基づくメッセージの交換ではなく、話し手の態度への同一化のプロセスとして理解される。この着想は、あるコードがそもそもいかにして言語共同体内で共有されるかを具体的なコミュニケーションの記述を通して解明するものであり、メルロ=ポンティの言語論はその点でソシユール言語学をコミュニケーションの視座から補完ないし拡張するものと位置づけることが可能である。

は じ め に

メルロ=ポンティが中期にソシユール言語学へと接近し、その諸概念を吸収したことは研究者の間ではよく知られている。ティリエットによれば、メルロ=ポンティの中期言語論は「ソシユールの名によって支配され」ており、エディによれば、中期のメルロ=ポンティの語りは「全面的にソシユール学徒のものだった」¹⁾。だが他方で、メルロ=ポンティのソシユール解釈には『一般言語学講義』（以下『講義』）の記述を逸脱する部分が多々見られることも指摘されている²⁾。こうした事情も手伝って、「メルロ=ポンティのソシユール解釈」という出来事のコアが

どこにあったのかを見通すことは極めて難しい。本論では、これまでメルロ=ポンティの言語論やソシユール解釈を論じる際にほとんど言及されることのなかった「社会的なもの」とコミュニケーションについての彼の議論を手がかりに、ソシユールへの接近とソシユール学説の変形を動機づけていたメルロ=ポンティの言語に対する問題意識の一端を浮き彫りにすることを試みる。

1. 言語学と社会学 —— 中期思想の問題設定 ——

1.1. 「第三の次元」としての言語

メルロ＝ポンティがソシュールの名にはじめて明示的に言及するのは、1947年に発表された論文「人間の内なる形而上学的なもの」である。この論文の前半部分の主題は、同時代の心理学、言語学、社会学、歴史学などを通覧しながら、意識と物、対自と即自、主観と客観、内在と超越といった古典的な二項対立に収まらない新しい存在論的カテゴリーを各々の分野における共通した発見として取り出すというものである。この論文の中でソシュールに割かれている紙数は論文全体の構成からすれば僅かなものにすぎず、さらに言えば、示差性、恣意性、パロール＝ラング、共時態－通時態といった、一般にソシュール言語学の主要概念とみなされる概念についてもまだ明確には言及されていない。しかしそれゆえにこそ、この論文はメルロ＝ポンティがソシュール受容の最初期にどのような動機に促されてソシュールに接近したかを証言する貴重なテキストであるように思われる。

メルロ＝ポンティはこの論文でまず、同時代のゲシュタルト心理学の成果に言及し、心理学者たちが発見した「ゲシュタルト」や「構造」といった概念は、心理学において内観法と客観的観察の対立として現れていた「意識か物か」という古典的な二者択一に収まらない新しい存在論的カテゴリーを形成しており、この存在論的カテゴリーを練り上げることこそが今日の心理学の課題であると主張する。そしてさらに、ソシュール以後の言語学者たちが論じている「言語 (langue)」の概念も、ゲシュタルトや構造の概念と同様、意識か物かの二者択一に収まらない新しい存在論的カテゴリーを形成していると述べる。

《客観的方法》と内観法とに分割された心理学が、外からも内からも把握されるべき行動のゲシュタルトという観念のうちにその平衡を見出すに至ったのと同様に、言語学も物

としての言語か語る主体の所産としての言語かという二者択一を乗り越えるという課題に直面しているのだ。言語は、各々の語る主体の周りにあって、それ自体の惰性、要求、制約、内的論理をそなえた道具のようなものでありながら、にもかかわらず語る主体たちの発意 (initiative) に（さらには侵入とか流行とか歴史的出来事といった生まの寄与にも）常に開かれ続けており、この論理によろめくような足取りをとらせる意味の滑りや多義性、機能的代用といったものを常に受け容れうる、といったものでなければならない (SN 107/127 強調は原文)³⁾。

ここでメルロ＝ポンティが言わんとしているのは、言語というものがもつ二つの存在論的特性である。

第一に、言語は伝統的な意味での「実体」—— 存在するために己以外の何ものも必要としない存在者 —— ではない。同一の、あるいは似通った音声異なる言語共同体において異なる意味をもつことから明らかなように、言語というものがもつ本質的特性は、発せられた音声それぞれとして有する物理的性質ではなく、言語を話し理解する主体の意味付与作用によって構成されている。その意味で言語は「語る主体の所産」である。

しかし他方で、言語は個々の話者が全面的に自らの自由に基づいて構成したものではない。特定の言語共同体において話されている言語は、その共同体の成員のうちの特定の誰かが作ったわけではない。にもかかわらず、個々の話者は他人とコミュニケーションを行なうためにはもちろん、自分自身にとって意味ある発話を行なうためにすらその言語の語彙や規則に基づいて語ることを強制されており、それらを変更することは不可能ではないにせよ多大な努力を必要とする。それゆえ、言語はその存在を語る主体に依存している一方で、語る主体が完全には自由にしえない拘束性を呈するという両義的な存在性格を有している。

メルロ＝ポンティはこの論文の中で、ソシュールの功績は言語を物として研究する従来の言語学の態度と、言語を意識の所与として研究する態度

を両方とも正当なものと認めたことにあると述べるが、そうした評価の背景にあったものは、上述した言語の両義的存在性格への着目だったと言える。のちにコレージュ・ド・フランスの教授に就任する際に執筆された公式の研究計画「資格と業績」(1952年)の中で、メルロ=ポンティは主観と純粋な対象の手前にある「第三の次元」(PAII 12)を研究する必要性を語っているが、言語はまさしくそうした新しい存在論的カテゴリーのモデルとみなされるのである⁴⁾。

さらに、「人間の内在的形而上学的なもの」の二年後にパリ大学で行なわれた講義「意識と言語習得」の中で、メルロ=ポンティは言語についてのソシールの分析を手引きとして「個人と社会的なものの関係という哲学上の主要問題」を解明するという研究プログラムを提示している(MS 82/119)。これと同様の展望は「資格と業績」の中でも提示されており、メルロ=ポンティにとって、言語は単なる独立した研究対象ではなく「社会的なもの」というより包括的な事象の一特殊例として捉えられていたことが窺える(PAII 31f)。それゆえ、メルロ=ポンティが言語について述べていることと社会的なものについて述べていることを相互に突き合わせることで、彼の中期言語論を従来とは異なった角度から理解することが可能になるだろう。

1.2. 集合意識から間主観性へ

以上を踏まえたうえで、再び「人間の内在的形而上学的なもの」の議論へと目を向けよう。心理学と言語学における新しい存在論的カテゴリーの発見を論じたあと、メルロ=ポンティは同じ発見が同時代の社会学においても見られると述べ、デュルケームの『宗教生活の原初形態』を取り上げる。そこでメルロ=ポンティは「社会的事実を物のようにみなす」というデュルケームの有名な公準に対して次のような批判を加える。

デュルケームは社会的なものを個人に外的な実在として扱い、それに個人にとって当為として現れてくる一切を説明する責務を負わせた。だが、社会的なものがこの役目を果た

しうとしたら、それは、社会的なものがそれ自体物のようなものではなく、個人を攻囲し、個人を促すと同時に脅かすような場合、さらにまた、各々の意識が他の諸意識との関係のうちに己を見出すと同時に己を見失うような場合、要するに、社会的なものが集合意識(*conscience collective*)などではなく、間主観性、すなわち諸個人間の生きた関係であり緊張である場合だけだろう(SN 110/130f 強調は原文)。

言語についてと同様、ここでのメルロ=ポンティの論点は「社会的事実」ないし「社会的なもの」という概念が先述した第三の存在論的カテゴリーに属することを示すことにある。だが、ここでのメルロ=ポンティの議論は直前に行なった言語についての議論よりもわずかに踏み込んだものとなっている。というのも、ここでは社会的事実を「物」とみなす視点も「集合意識」とみなす視点もともに退けられ、代わりに社会的事実の座を「間主観性」なるものへと求める見解が新たに提示されているからである。

社会的事実を「物」とみなす考えが、社会的事実の素朴な実体視につながりかねないという理由で慎重に回避されていることは、これまでのメルロ=ポンティの議論からも明らかであろう。しかし、それと同時に「集合意識」という概念も退けられなければならないのはなぜだろうか。このことを検討するには、「集合意識」と「間主観性」の概念的規定をそれぞれ明らかにしておく必要がある。

よく知られているように、デュルケームの「集合意識」(「集合表象」と呼ばれることもある)は、その固有性と独自性、個人意識との異質性、個人意識への還元不可能性などによって特徴づけられる。デュルケーム曰く、「集合意識の諸状態は個人意識の諸状態とは性質を異にしており、別種の表象を成している」。「社会的事実を構成するものは、集合的に把握された集団の諸信念、諸傾向、諸実践である。集合的諸状態が個人において屈折することによってとる諸形態はといえば、それらは別種のものである」。「社会を個人から、全体を

部分から、複雑なものを単純なものから演繹できないように」集合表象を個人表象から演繹することはできない……云々⁵⁾。

そして、デュルケームはこうした集合意識の産物である社会的事実が、個人に対しては専ら拘束として現れるという事実を強調する。社会的事実を物のようにみなすという周知の言い回しも、社会的事実がもつこうした義務的・拘束的性格を言い表すためのレトリックという面がある。「ある物が認識されるとき、その主な指標となるのは、それが単なる意志の決定によっては変形されえないという事実である。もちろん、物はあらゆる変形に抵抗するわけではない。だが、物に変化を生じさせるためには、その変化を欲するだけでは十分ではなく、多少とも骨の折れる努力がさらに必要とされる。物には我々に手向かってくるような抵抗力があって、しかもそれが常に克服されうるとは限らないためである。ところで、すでに見たように社会的事実はこうした特性をもっている。それは我々の意志の産物であるどころか、外部から我々の意志を規定するものである。それは我々の行為が必然的にそこに流し込まれていく種々の鑄型のようなものから成っている」⁶⁾。

最後に、社会的事実がこうした義務的・拘束的性格をもつからこそ、集合意識は共同体のあらゆる成員に一般的に見出されるとデュルケームは述べる。「社会的諸現象を特徴づけるのに役立つものはそれらの一般性ではない。あらゆる個人の意識のうちに見出される一つの思考や、あらゆる個人が反復する一つの運動は、だからといって社会的事実であるわけではない。人々が社会的事実を定義するのにこの特徴をもって満足していたとすれば、それは、社会的事実をその個人的具現 (incarnations individuelles) とでも呼ぶべきものと誤って混同してしまったからである」。「もしある現象が一般的なものだとすれば、それは当の現象が集会的なもの（すなわち、多かれ少なかれ義務的なもの）であるからであって、一般的なものであるがゆえに集会的なものであるのではない。それは集団の一状態であり、諸個人に課されるものであればこそ、個人において反復されるのだ」⁷⁾。

他方、メルロ＝ポンティは個人的なものと社会

的なものの関係をどのようなものとして考えていたのだろうか。それを検討する際に手がかりとなるのは、『知覚の現象学』第三部第三章「自由」における議論である。そこで彼は、自己というものをその意識の中心においては〈労働者〉や〈ブルジョワ〉といった一切の社会的規定を免れた「純粹意識」ないし「純粹な主観性」であると考えた観念論的立場を批判する。メルロ＝ポンティ曰く、もし私がのちに自分を外部から眺めることによって自分を〈労働者〉や〈ブルジョワ〉として見出すことが可能であるとすれば、私はそもそもの始まりから純粹意識などではなく、〈労働者〉ないし〈ブルジョワ〉として実存していたのでなければならぬ。こうしたことが可能なのは、私というものが世界を外から構成する主観ではなく、道具をはじめとする文化的存在物に満たされた環境や、他者たちとの共存の中に投げ込まれた「具体的主観」(PP 514f/2.366)だからである。〈労働者〉や〈ブルジョワ〉としての私の実存は、私が自分自身をそうした肩書きをもった存在として意識する以前に、環境や他者たちと私の一定の関わり方によって規定されているとされる⁸⁾。

このように、メルロ＝ポンティにおいては環境や他人から切り離された孤立した自己というものは考えられず、自己はそもそもの始まりから社会的存在として捉えられているわけだが⁹⁾、その中でも彼はとりわけ、他人というものが社会的存在としての自己の形成に本質的に関わっているという事実を重視する。というのも、メルロ＝ポンティは環境と自己の関わりの中にすら他人という存在の関与を見て取るからである。その考えがよく窺えるのが『知覚の現象学』第二部第四章「他人と人間的世界」であろう。そこで彼は、我々を取り巻く諸々の制作物に他人（ただし、それは特定の誰かではなく〈ひと〉という一般の様態において捉えられた他人であるとされる）の志向が刻印されており、我々が制作物と関わる時、実は我々は制作物そのものを介して一般化された他人の志向と関わっていると述べている (PP 404f/2.210f)。つまり、我々が道具や建築物といった文化的存在物と結ぶ関係は対人関係の（極めて特殊ではあるが）一様態とみなされているのである。

この考えはのちに講義「大人から見た子ども」の中で再び表明され、さらにそれは集合意識とは異なる「間主観的な考え」であると述べられるに至る。

ヘーゲルは客観的精神（人間精神が己の創造物や制度のうちに現れるというような意味で、人間精神が己の周囲に投影されたもの）と主観的精神（我々が我々自身において把握するがままの人間精神）を区別した。この客観的精神という考えは、集合意識とは大きく異なっている。それが目指しているのは仮説的な実在ではなく、諸々の事実、すなわち諸々の人間的制作、人間のあらゆる創造物を印づける諸々の志向の刻印（それは人間によって根本的に変えられてしまった風景のうちにも見てとれる）なのだ。〔…〕個人がそこで生きている枠組みは、その枠組みを形成するのに寄与したさまざまな態度を捉え直すよう絶えず個人を促している〔…〕これは間主観的な考え（各々の個人による他者たちへの同一化）である〔…〕（MS 129f/195f 強調は原文）。

メルロ=ポンティにおいて、間主観性とは各々の個人による他者たちへの同一化と投影の運動であり、これは環境や他人との関わりにおいて常に個人を促しているとされる。社会的なものを「間主観性」として捉えるというメルロ=ポンティの考えがどのようなものであるかは、以上の検討である程度明確になったと思われる。

さて、ではこうした「間主観性」概念はデュルケームの「集合意識」概念といかなる点で対立するのか。いくつかの論点が考えられるが、ここでは特に、「集合意識」概念の前提となっている、個人と社会を厳密に分離することができるという想定そのものに対するメルロ=ポンティの疑義を挙げておこう。すでに見たように、メルロ=ポンティにおいては社会から切り離された個人（自己）なるものはそもそもの始まりから存在しえないとされていた。公平を期すため述べておけば、デュルケーム自身においても、個人と社会は完全

に分離して存在するとは考えられていない¹⁰⁾。しかし、デュルケームはたとえ方法論的要請からであれ、集合的なものを個人的なものから分離し、社会的事実の拘束性を集合現象の「物的」な自立性に帰することで、社会と個人を抽象化し、両者の現実的結合という事態から目を背けてしまう傾向があることは否めない。メルロ=ポンティが集合意識は「仮説的な実在」だが間主観性は事実であると述べる時、そこには個人と社会的事実的な混淆を重視する、言い換えれば、デュルケームが集合現象から徹底して分離しようとした「個人的具現」の次元から社会的なものを考察しようとする彼の基本姿勢を読み取ることができるだろう。デュルケーム本人がいみじくも述べていたように、その次元においては、社会的なものは個人の有機的・心理的構造並びにその個人が置かれている特殊な諸状況と混ざり合っているのである¹¹⁾。

2. 中期言語論とソシール

前章で我々は、初期から中期にかけて、メルロ=ポンティが言語についてのソシールの分析を社会的なものの全般の存在論へと拡張しようとしていたこと、そして社会的なものを物でも集合意識でもなく、間主観性の次元から考察しようとしていたという事実を確認した。では、社会的なものを考察する際のメルロ=ポンティのこうした基本姿勢は、彼の言語論、さらにはソシールを受容する際の彼の態度にどのような影響をもたらしたのだろうか。本章ではこの二つの問いを順に検討していくことにする。

2.1. 言語とコミュニケーション

言語が社会的現象の一事例であることは、メルロ=ポンティの指摘を待つまでもなく多くの論者によって語られてきた。とりわけ、言語の社会的性格が最もよく見て取れるのはコミュニケーションにおいてであろう。本節では、言語的意味の伝達という事象をメルロ=ポンティがどのように説明しようとしていたかを見ることによって、次節の内容と合わせて、彼の言語論においてもまた「間主観性」という概念が本質的な役割を果たし

ていることを示したい。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の第一部第六章「表現としての身体と言葉」のなかで、経験主義的言語論と主知主義的言語論をともに批判しながら自らの言語論を提示していく。経験主義的言語論は、言語活動を三人称的視点から観察することで、言葉が話者にとって内面的意味をもつという事実を見逃してしまう。他方、主知主義的言語論は言葉に内面的意味があることを認めるが、それは言葉とは独立に存在する思考によって言葉に外的に付与されたものであるとする。したがって、いずれの言語論も「語は意味をもつ (le mot a un sens)」(PP 216/1.291) という命題を認めないという点で結託している。この命題を認めることで、二つの立場は一挙に乗り越えられるのだ——そうメルロ＝ポンティは主張する。

メルロ＝ポンティはこの「語は意味をもつ」という命題を主張する意義を、我々が言語活動の中で日常的に経験している事象に依拠して説明する。彼の論点の一つは、我々は他人の言葉を通して自分が今まで所有していなかったような観念を手に入れることができるという事実である¹²⁾。こうした事象の例として、彼は外国語の学習や難解な哲学書の読解などを挙げている (PP 219/1.294)。メルロ＝ポンティは、経験主義的言語論と主知主義的言語論がともにこの事象を説明できないと批判する。彼の議論は錯綜しているが、その論旨を解きほぐせば以下になるだろう。

通常、古典的言語論は次のように考える。言葉とはそれ自体としては意味をもたない音の連なりにすぎず、語の意味とは思考によって語に外部から付与された観念もしくは思考内容である。したがって、語というものは意味のいわば外皮にすぎない。だが、意味の伝達という事象を考えると、こうした考えは困難に直面する。他人の発話を理解しようとする場面においては、聞き手が直接知覚することができるのは意味の外皮である語だけなのに、そこからどうやって聞き手は直接知覚することのできない語の意味を知ることができるのか。古典的言語論はそこで、聞き手は自分がすでに所有している観念を聞き取られた語に結びつけることで語の意味を理解するのだと説明する。し

かし、この説明では聞き手が与えられた言葉の中に発見しうるのは自分がすでに所有している観念だけだということになり、先に述べた新しい観念の獲得という事象を否認することになってしまう。

こうした問題に対してメルロ＝ポンティがここで持ち出す解決は、一見すると単純なものである。「語は意味をもつ」、すなわち、意味というものは語と一体になっていて、意味もまた語とともに直接知覚可能であると考えればよい、というのである。しかし、語の意味というものを、話し手の心の中にある観念や思考内容であるとみなす限り、語の意味が知覚可能であるというメルロ＝ポンティの主張は不可解なものにとどまるだろう。観念や思考内容といった他人の心的内容を直接に知覚することは、〈それを体験している本人しかアクセスできない〉という、心的内容というカテゴリーに対して通常与えられている規定からして不可能だからだ。メルロ＝ポンティはそこで、聞き手が語とともに知覚する意味とは、語の「概念的意味」(PP 219/1.294)、すなわち語の意味ということで通常イメージされるような、語と結びついた特定の観念ではなく、語の「所作の意味」(ibid.) であると主張する¹³⁾。彼によれば、言葉とは「所作 (geste)」の一種であり、所作とは主体が身体によって特定の状況と関わり合う仕方、すなわち主体の実存様態の表出である。観念や思考内容のような、他人にとって知覚不可能な対象とは異なり、実存様態は主体の内的経験と外的な身体現象の両面を貫いて現れており、それゆえ所作としての言葉の意味は他人にとっても知覚可能であるとされる¹⁴⁾。

ところで、身体的所作であれ言語的所作であれ、それを単独で考察した際には所作とそれが表現するものとの関係は恣意的に思われる。赤らんだ顔や振り上げた腕は、あらゆる文化、あらゆる場面において怒りを表現するわけではない。所作の意味は所作がもつ外面的特性 (物理的・生理的特性) からは一意に決定されえない。このことは所作を理解するという課題に直面した者に対して困難を提起する。所作とそれが表現するものの関係が恣意的だとすれば、特定の所作と結びつきうる意味は無数に考えられることになり、その中から

妥当な意味を決定することは不可能に思われるからだ。しかし、個々の所作は実際には、主体が己を取り巻く状況と関わる仕方、すなわち主体の実存様態を表現している。この実存様態なるものは、個別の所作の意味というよりは、主体が遂行する所作の各々にさまざまな表現価値を割り振る分節原理であると考えられる。観察者は所作を介してこうした分節原理を、行動を介して行動の構造を¹⁵⁾、部分を介して全体を知覚するのであり、前者の意味は後者が了解されたあとでそれに即して一挙に確定されるのだ¹⁶⁾。

以上の議論を踏まえたうえで一つの疑問が浮かぶ。我々はこれまで、言葉の意味（ひいては所作の意味）が知覚可能であると述べる時、知覚可能という言葉を専らアクセス可能という意味で用いてきた。しかし、他人の実存様態というものが知覚与件の一種であることを認めたとしても、それが「絨毯の色」（PP 225/1.303）のような典型的知覚与件とは別種のものであることは明らかだ。「絨毯の色」を知覚する場合、適切な距離や照明のもとで絨毯を見さえすれば、その作業はすぐさま完遂されるものと常識的には考えられている。他方、言葉の意味を理解する場合、特に、メルロ=ポンティが挙げる未知の外国語や難解な哲学書の場合、我々は発話やテキストを一瞥しただけでその意味を「理解」できるわけではない。「言葉の意味を知覚する」という表現が日常的な語法からすれば不自然な印象を与えるのも、こうした差異に起因している。にもかかわらず、我々が「語は意味をもつ」というメルロ=ポンティの命題から「言葉の意味は知覚可能である」という命題を引き出したのは、意味を観察者にとってアクセス不可能な心的内容とみなす古典的言語論に対して、それをあくまでアクセス可能なものとするメルロ=ポンティの言語論を対置するためであった。こうしたメルロ=ポンティの立場を維持しようとするならば、我々はさらに一歩踏み込んで「言葉の意味には（絨毯の色に対してとは異なる）いかなる仕方でのアクセスが可能なのか」と問わなければならないだろう。メルロ=ポンティの発話理解のシナリオに即して言えば、この問いにとって重要なのはとりわけ次の二点であるように思われ

る。第一に、それ自体は部分でしかない特定の所作の内に、いかにして諸々の所作を統制する全体が現れ出ることができるのか。第二に、そのように現れ出た全体に、観察者はいかにしてアクセスすることができるのか。『知覚の現象学』の中では、ここで問いに付した事象は半ば自明の事実のように扱われており、具体的な説明や分析はあまり見られない。それゆえ、以降は中期の議論の中にこの問いの答えを探っていくことにしよう。

2.2. メルロ=ポンティとソシール

前節の最後で提起した問題を直接検討する前に、我々はソシール言語学における「ラング (langue)」概念が中期にメルロ=ポンティの言語論の枠組みの中でどのように扱われるようになったかを考察してみたい。なぜなら、メルロ=ポンティ言語論における「ラング」概念の位置づけという問題を考えることによって、前節の問いの答えも自ずから与えられるように思われるからである。

ソシールが『講義』の中で行なった「ラング」についてのさまざまな規定を見てみよう¹⁷⁾。ソシール曰く、ラングは「言語活動 (langage)」の能力の一つの社会的生産物であり、また諸個人におけるこうした能力の行使を可能にするために社会集団によって採用された、必要な規約の総体である¹⁸⁾。それは言語活動によって結ばれたあらゆる個人の間に確立された「平均値 (moyenne)」であり、それによって「皆が —— おそらく正確にはないにせよ、近似的に —— 同一の概念と結合した同一の記号を再生産することになる」¹⁸⁾。

さらに、ラングは「個人に外在し、個人には創造することも変更することもできない言語活動の社会的部分」であるとされると同時に、「脳に座をもつ実在」「各人の脳に預託された社会的生産物」とも規定される¹⁹⁾。「個人に外在する」とことと「脳に座をもつ」ことは一見すると矛盾するように思われるが、ラングの座はあくまで個人（の脳）であり、外在性とは個人がラングを意のままに創造したり変更することができないという拘束性の謂として了解すべきであろう。ラングがなぜそのような拘束性をもつかと言えば、それはラン

グが社会的（集合的）なものだからであるとされる²⁰⁾。

こうしたソシユールの「ラング」概念の規定は、デュルケームの「集合意識」概念と興味深い類似を示しているという指摘がある²¹⁾。実際、ソシユールは言語活動の「社会的部分」であるラングを取り出すために、それを個人における発話行為の遂行であるパロールから厳密に区別している。諸々の個人が遂行する個々の発話はそのつど一回的なものであり、互いに非等質的であるので、共同体の全成員に共有されている等質的構造としてのラングの範疇には含まれえないとソシユールは考えたのである。この操作は、デュルケームが純粋な集合現象を取り出すにあたって、集合現象をその「個人的具現」から厳密に区別したのと極めて正確に照応する。デュルケームにおいてもまた、集合現象はその個人的具現の次元においては「個人の有機的・心理的構造並びにその個人が置かれている特殊な諸状況」と混ざり合っているため、共同体内に一般的に見出すことのできる等質性をもたないとされたのであった。このように、ソシユールにおけるラングとパロールの区別は——デュルケームにおける集合的なものとその個人的具現の区別と同様——社会的なものを個人的なものから純化して取り出すという役割を果たしている、すなわち、共同体の全成員に共通して現れる一般現象を、諸々の個別事例において現れるあらゆる特殊な不純物から分離するという役割を果たしている²²⁾。

前章で我々は、集合現象を個人現象から分離して取り出すデュルケームの操作がメルロ＝ポンティの立場からは回避されているということを確認した。では、それと照応するソシユールのラングとパロールの区別に対してはどうだろうか。少なくとも、メルロ＝ポンティのテキストの中でこの区別に対する明示的な批判は見られない。それどころか、彼自身が中期以降、ラングとパロールという用語を——必ずしも正確な仕方ではないが——多用している。しかし、ここでは用語の表面上の一致よりも、二人が自らの理論的枠組みの中でこれらの用語を用いる仕方に着目すべきであろう。というのも、冒頭で触れたように、メ

ルロ＝ポンティのソシユール理解は『講義』の内容を逸脱した誤読ないしは再解釈という性格をもっているからである²³⁾。

我々が見てきたメルロ＝ポンティの二つの議論——言語を社会的なものの一特殊例とみなすとともに、社会的なものをその個人的具現の次元から捉える議論、並びに、言語を介した新しい觀念の獲得という事象を重視し、コミュニケーションを与えられた語と既得の觀念の照応操作とみなすことを拒否する議論——を踏まえたとき、それらの論理的帰結として、メルロ＝ポンティの言語論において「ラング」概念はどのような位置づけを与えられなければならないかを考えてみよう。

第一に、社会的なものと同様、ラングもまた純粋な集合現象としてではなく、その個人的具現という次元から捉えられなければならないだろう。では、ソシユールにおいてはパロールこそが個人的なものと規定されていたわけだから、言語論の文脈では個人的具現の次元とはパロールの次元とみなすべきなのだろうか。確かに、メルロ＝ポンティはラングを言語学の主要な研究対象として指定する『講義』の叙述に反して、パロールの優位性を強く主張している（RC 34/24）。しかしその場合、社会的なものについての議論の中でデュルケームの「集合意識」を概念のみならず用語としても退けたのとは異なり、メルロ＝ポンティが「ラング」を概念としても用語としてもことさらに退けようとしている様子はないという事実はどうのように理解すべきだろうか。この点は、ラングとパロールの区別には、社会的なものと個人的なものの区別と並んで、言語体系と言語運用の区別という二種の区別が同時に託されていることを踏まえれば合理的に解釈できる。すなわち、メルロ＝ポンティにおいては、ラング＝社会的、パロール＝個人的という二分法的な図式は——社会的なものを扱う際の彼の基本姿勢からして——採用されえないが、他方でラング＝言語体系、パロール＝言語運用という区別はそうした基本姿勢と矛盾することなく採用されうるし、実際に採用されていると考えればよい。かくして、メルロ＝ポンティにおいては、個別の言語運用のみならず、言語体系それ自体が個人が置かれた特殊な諸状況

との絡み合いの中で捉えられねばならないと考えられる。

この帰結をさらに具体的に考えてみよう。例えば「病院」という語は、幼い頃から入院生活を送ってきた人物と、親しい人間を病院で亡くした経験のある人物、さらには病院に一度も行ったことのない人物のそれぞれにとって異なったイメージをもつだろう²⁴⁾。しかし、個人の生体験に由来するこうした特殊なニュアンスはソシールの意味でのラングには登記されない。ソシールにとって、ラングとはその定義上、共同体の全成員に見出される言語活動の等質的部分でなければならないからである。辞書にはまさしく、あらゆる個人的ニュアンスを差し引いて共同体内で一般に見出される（と考えられる）意味だけが記載されるが、具体的生活の中で用いられる限り、言葉は辞書的な意味の範囲に収まり続けることはない。例えば、初めて足を踏み入れた建物を「まるで病院のようだ」と表現するとき、発話者は他の可能な選択肢の中からあえて「病院」という語を用いることでそこにどんなニュアンスを込めているのだろうか。彼/彼女が目の中の空間や行き交う人々の様子から感じとっているのは、かつての入院生活を支配していたあの孤独と退屈か、親族の死の知らせを受けて待合室に駆けつけたときに漂っていたあの陰鬱な雰囲気か、はたまた、彼/彼女は単に目の中の建物と病院の構造上の類似を指摘しているだけなのか。いずれにせよ、この発話の意味は発話者が「病院」という語に抱いているイメージ、さらにはそうしたイメージを発話者が「病院」という語に込めるに至った経緯まで考慮に入れなければ十全に理解しえないだろう。個人的具現のレベルで捉えられたラングは、このように個人の特殊な生体験と混ざり合い、個人が己を取り巻く状況と関わり合う仕方と一体になっていると考えられる²⁵⁾。

ラングをこのように主体が言葉を用いて状況と関わり合う仕方として捉えることによって、コミュニケーションの問題はどのように捉え直されるだろうか。もし個人が語に込める特殊なニュアンスなるものが、それを発話した本人にしかアクセスしえない心的なイメージであるとするれば、

我々は他人の発話を一体どうやって理解することができるのか。このように考えたとすれば、我々はまたしても、意味の外皮としての語と聞き手が所有する觀念の照合操作という古典的な発話理解のモデルに行き着くことになるだろう。こうしたモデルが抱える問題点は前節ですで見たとおりである。メルロ=ポンティはこうしたモデルの前提となっている、言葉の意味とは心的内容であり、心的内容はそれを経験している本人以外にはアクセス不可能であるという考えそのものに異を唱えた。彼は代わりに、言葉とは所作の一種であり、所作の上に現れている発話者の実存様態を知覚することによって聞き手は言葉の意味を理解するというモデルを提示した。さて、我々はここでもうやく前節の最後で提起した問いを議論することができる。その第一の問いは、部分としての所作を介していかにして諸部分を統制する全体が現れることができるのかというものであった。

この問いは、メルロ=ポンティによるラングの存在規定を考察することで解決されるだろう。メルロ=ポンティによれば、コミュニケーションのそのつどの瞬間に見て取られる言語体系とは、特定の語に常に特定の意味を結びつけるような「公式の文法体系」ではない。[[コミュニケーションの]各瞬間には、しかしかの記号にしかしかの意味を帰属させる公式の文法体系の下に、そのような体系を支え、それとは別の仕方でものを為す別の表現体系が透かし見える[…]] (PM 41f/48)。この別の表現体系は、各々が決まった意味と結びついた有限個の記号の目録ではなく、それらの記号を主体がそのつど一つの意味を表現するために使い分ける仕方——「区別の原理」——として規定される (PM 46/52)。二つの体系の違いをよく心得ておこう。この前文法的な体系のレベルにおいては、記号は己と常に一対一で対応する一般的意味を持ち合わせておらず、そのつどの状況における使われ方に応じて無数の特殊なニュアンスを帯びることになる。こうした「区別の原理」としての表現体系という考えは、「弁別的、対立的、否定的」な純粋価値の体系というソシールの記号体系の定義を彷彿とさせるものだ。事実、メルロ=ポンティは言語体系をこのように規定する際

に「ラングの中には実定的な辞項をもたない差異だけがある」というソシュールの言葉を引用している (PM 45/51)²⁶⁾。とはいえ、「弁別的、対立的、否定的」という特性を、記号そのものではなく、主体が記号を用いる仕方、主体の行動のスタイルの次元で考察している点は、ソシュールにはないメルロ＝ポンティの重要な独創であると言わなければならない。注目すべきは、メルロ＝ポンティの中期の諸テキストの中で、ラングのこのような再規定こそが諸々の言語的所作の内にそれらを統制する全体が現れることを説明するロジックを構成しているという点である。「ソシュールが語る統一性は、円天井の互いに支え合う諸要素の統一性にも似た共存の統一性である。この種の総体においてはラングの獲得された諸部分がただちに全体としての価値をもつ […]」(S 64/1.59)。部分において全体が現れ出ることが可能であるとすれば、それは部分そのものが己を必然的に全体へと送り出すような何らかの特性を有している場合だけであろう。「弁別的、対立的、否定的」という記号の規定は、部分をまさしくそのような特性を有したものとして考えることを可能にし、「部分における全体の切迫」(S 66/1.60) という事象を説明するのだ。かくして、第一の問いの答えは得られた。所作という部分を介して所作を統制する全体的原理へとアクセスすることが可能なのは、所作の意味というものが、その所作と結びつく特定の観念ではなく、行動のタイプであり、そしてそれはその所作が単独で所有しているものではなく、その所作と他の諸々の所作との間に存在する示差の関係によって規定されるものだからである。

以上を踏まえたうえで、第二の問いの検討に移ろう。すでに見たように、個人的具現の次元においては、ラングは主体が状況と関わる仕方と一体になっており、主体を取り巻く個人的（個別的）な諸事情に由来するさまざまな特殊性を身に蒙っている。それゆえ、発話を十全に理解しようとする聞き手は、集団内で公約数的に見出される一般的意味を与えられた語に当てはめるだけで満足するわけにはいかず、そこに込められた特殊なニュアンスにまで到達しなければならない。そうした

プロセスがいかにして成し遂げられるかを、メルロ＝ポンティは中期のテキストの中で読書行為の分析を通じて描き出している。それは例えば次のような具合である。

我々が哲学者を読み始めるときには、彼が用いている諸々の語にそれらがもつ「共通の (commun)」意味を与えることから始めるものだが、そのうち少しずつ、はじめは気付かれないような転倒によって、彼の発話 (parole) が彼の言語 (langage) を支配していき、ついには彼の語の用法こそがそれらの語に彼固有の新しい意味を割り当てるに至るのである。そのときにこそ、彼は了解され、彼の意味が私の内に据えつけられるのだ (S 147f/1.142f)。

テキストを読解する際には、読者はさしあたってそこに書かれた諸々の語に「共通の意味」を投影していくことから出発する。これはいわば既知の一般的意味に照らした意味の理解であり、理解のプロセスがここで終了してしまう場合は、発話そのものの特殊性へと到達するという本来的な理解は成し遂げられないことになるだろう（そして、そのようなケースも日常的には多々見られると思われる）。しかし重要なのは、本来的な理解が成し遂げられる場合には、発話理解のプロセスはそこで終わらないということである。既知の一般的意味を投影していく過程で、読者は投影した言語用法に対する作者の言語用法の距たりないし差異を知覚するようになる。この差異は出鱈目に出現するわけではなく、ある一貫性を有しており、それゆえこうした差異が十分に与えられると、あたかも諸々の射映を超えて物が超越的对象として姿を現わすように、作者の言語用法が読者の前に顕在化される。こうして、読者の言語用法が投影の過程で「脱中心化」され、作者の言語用法へと「再中心化」されていく。新しい意味が理解される際には、こうした作用が常に生じていると考えられる²⁷⁾。かくして、第二の問いへの答えは次のようになるだろう。個々の言語的所作の内に現れ出る全体性へと聞き手がアクセスするのは、差異

の知覚を通じて、すなわち自らが投影した言語用法と話し手の言語用法との間に存在する距たりが知覚され、それによって話し手の言語用法そのものが徐々に聞き手の前に現前するというプロセスを通じてである、と。

結 論

すでに見たように、メルロ＝ポンティとソシールの議論は、彼らが拠って立つ前提からして大きく異なっている。ソシールは、言語学を科学として樹立するという彼の基本的関心に即して、ラングを共同体の全成員に共通して見出される等質的構造として規定した。個人がそのつど遂行するパロールは、個人の心理構造や個人が置かれた状況といった言語外の諸要因に応じて無限に多様になりうるため、言語活動の本質的部分の研究からは除外されるべきとソシールは考えたのであった。それに対して、メルロ＝ポンティは現象学の立場から言語活動の雑多な現実の中に一挙に飛び込んでいく。個人において具現された言語体系はその個人が状況と関わり合う仕方と不可分であり、それゆえ共同体の成員同士の間ですら等質的なものではありえない。このような前提に立ったとき、コミュニケーションは共通のコードに基づいたメッセージの交換——これはヤコブソンが好んで採用したモデルである——よりも、むしろ暗号解読に似たものとして現れてくる²⁸⁾。発信者（話し手）と受信者（聞き手）の間のコードの共有という事態は自明の前提ではなくなり、未知のコードに即して生産されたメッセージからいかにしてコードそのものを読み出すかこそが問題になる。こうした暗号解読のプロセスは、メルロ＝ポンティにとってコミュニケーションの例外的様態であるどころか、コミュニケーションの第一次的な基本様態とみなされる²⁹⁾。

このような言語への基本的なアプローチの違いにもかかわらず、メルロ＝ポンティがソシールを批判するよりはむしろ積極的に評価したのはなぜだろうか。その理由の少なくとも一端は本論の考察を通じて明かされているように思う。メルロ＝ポンティが最終的にソシールの最も大きな功

績として認めたのは、記号体系の弁別的特性を発見したことであった。それがメルロ＝ポンティにとって大きな功績たりえた理由の一つは、所作という部分の内にいかにして全体が現れることができるかという、『知覚の現象学』のコミュニケーション論に残されていた問題を解決してくれるものとして彼がソシールの発見を受容したからだと言えるだろう。この点に関するメルロ＝ポンティの独創は、ソシールが単に記号体系の構成原理として提示した記号の示差性の概念を、コミュニケーションの根源的な場である知覚と現在の領野への記号体系の受肉——「[...] パロールの諸体系や、それらが目指す意味の明白な存在は、知覚ないしは現在の次元 (ordre) に属しているものであって、観念や永遠の次元に属しているのではない」(PM 57/60)——及び、そこから帰結する記号体系への知覚的なアクセス可能性を保証する原理として捉え直したことにある。

また、我々が本論で考察したメルロ＝ポンティの言語論の諸特徴は、ソシールの学説と全面的に相容れないものではない。とりわけ、我々が注目したコミュニケーション論の観点から言えば、メルロ＝ポンティの言語論は、コードの共有を前提としない意味伝達のメカニズムを記述することによって、ソシールが言語学成立のための前提としていた「共同体の全成員によるラングの（近似的な）共有」という事態がそもそもいかにして成立しうるかを解明する、すなわち、ソシールの学説にコミュニケーションというより基底的なレベルから根拠を与えるものであると解釈できるだろう。

最後に、本論が辿った道を逆に辿り直すことによってメルロ＝ポンティ解釈をさらに展開していく可能性に触れておく。我々は、社会的なものを徹底して個人における具現という次元から捉えるというメルロ＝ポンティの視座を経由して、ラングが個人において具現された際の存在様態としてソシールの示差性の概念を捉え直すという彼独自の着想を見出した。言語が社会的なものの一事例としてみなされていた以上、言語の探求を通して見出されたこの受肉の原理としての示差性という着想は、社会的なものの存在様態という問題全

般へと拡張しうる。実際、メルロ=ポンティは1954年の「個人及び公共の歴史における制度化」講義の中で、言語の問題を超えて、行為や歴史の問題を論じる中でも「閉じられていない、距たりや差異としての意味」(IP 35)に言及するようになる。こうした拡張の意義を検討することは今後の課題としたい。

注

- 1) Xavier Tilliette, *Merleau-Ponty ou la mesure de l'homme*, Seghers, 1970, p. 160. James M. Edie, *Speaking and Meaning: The Phenomenology of Language*, Indiana Univ Pr, 1976, p. 89.
- 2) メルロ=ポンティの「誤読」の内実とそれに対する先行論者たちの議論のまとめは, Anna Petronella Foulter, 'Merleau-Ponty's encounter with Saussure's linguistics: misreading, reinterpretation or prolongation?' *Chiasmi Internatinal*, No. 15, 2013, pp. 129-150. を参照.
- 3) メルロ=ポンティの著作は以下の略号で表記し、スラッシュの前後に原書と邦訳の頁数を記した。文献が複数巻に渡る場合は頁数の前に巻数も記した。
 PP: *Phénoménologie de la perception*, tel, Gallimard, 1976 [1945]. 邦訳『知覚の現象学』。1巻, 竹内芳郎・小木貞孝訳, みすず書房, 1967年。2巻, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳, みすず書房, 1974年。
 SN: *Sens et non-sens*, Gallimard, 1996 [1960]. 邦訳『意味と無意味』滝浦静雄・木田元・栗津則雄・海老坂武訳, みすず書房, 1983年。
 S: *Signes*, folio, Gallimard, 2001 [1960]. 邦訳『シーニュ』。1巻, 竹内芳郎監訳, みすず書房, 1969年。2巻, 竹内芳郎監訳, みすず書房, 1970年。
 RC: *Résumé de cours: Collège de France 1952-1960*, Gallimard, 1968. 邦訳『言語と自然』滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1979年。
 PM: *La prose du monde*, tel, Gallimard, 1992 [1969]. 邦訳『世界の散文』滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1979年。
 MS: *Merleau-Ponty à la Sorbonne: résumé de cours 1949-1952*, cynara, 1988. 邦訳『意識と言語の獲得 ソルボンヌ講義 I』木田元・鯨岡峻訳, みすず書房, 1993年。
 PAII: *Parcours deux 1951-1961*, Verdier, 2001。
 IP: *L'institution/La passivité: Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*. Belin, 2003.
- 4) 言語を「第三の次元」とみなす考えは, 家高洋『メルロ=ポンティの空間論』(大阪大学出版会, 2013年) 99-103頁から示唆を得た。ただし, 我々は言語はあくまで第三の次元の特性を考える際のモデルであって, 第三の次元というカテ

ゴリー自体は経験の全領域及び全階梯を貫く基本カテゴリーであると考ええる。

- 5) Emile Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique*, PUF, 1937 [1895], p. XVII, 8. *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, PUF, 1960 [1912], p. 22.
- 6) Durkheim, *Les règles*, p. 29.
- 7) *Ibid.*, p. 8, 10.
- 8) 「[...] ブルジョワであるとか労働者であるということは, 単にそうであると意識しているということではなく, 我々が世界を形態化し他者たちと共存するその仕方に付随する暗黙のないし実存的投企によって, 自己を労働者として, あるいはブルジョワとして価値付けすることなのである」(PP 511/2.362)
- 9) 「最も根本的な反省においてすでに, 私は私の絶対的個性の周りに一般性の光輪のようなもの, あるいは《社会性》の雰囲気のようなものを把握していなければならない。後になって《ブルジョワ》とか《人間》とかいった語が私にとって一つの意味をもちえなければならないとすれば, そうしたことが必要なのである。私は私をただちに私自身の中心から外れたものとして把握していなければならないし, 私の単独の実存はいわばその周りに肩書きをもった実存を拡散させていなければならない。〈対自〉—— すなわち, 私自身にとっての私と他人自身にとっての他人 —— は, 〈対他〉—— すなわち, 他人にとっての私と私自身にとっての他人 —— の地の上に浮き上がってくるのでなければならない。[...] 厳密な意味での間主観性が存在しなければならない [...] のである」(PP 512/2.363)
- 10) この点については, 佐々木交賢『デュルケーム社会学研究』(恒星社厚生閣, 1978年)第一章を参照。佐々木はアルバートの論に拠りながら, デュルケームの立場を社会実体論や社会有機体説の一種とみなす。G. ギュルヴィッチらの批判に対して, デュルケームの立場は社会を諸個人の相互作用の産物とみなす「アソシエーション・リアリズム」であると反論している。このように解釈すれば, メルロ=ポンティとデュルケームの立場は, 少なくとも社会というものの捉え方という点においてそれほどかけ離れていないと見ることもできる。
- 11) Durkheim, *Les règles*, p. 10.
- 12) メルロ=ポンティはもう一つの論点として, 我々は対象や自分の思想をそれを名づけたり言葉にしたときに初めて明確に認識することができるという事実, いわば言葉の発見術的機能についても論じているが, ここでの議論にはさしあたり関係がないため割愛する。
- 13) メルロ=ポンティは「所作の意味」という言葉を「実存の意味」(PP 222/1.299)や「情動の意味」(PP 227f/1.307)とも言い換えている。
- 14) 「私は他人を行動として知覚する。例えば私は他人の悲しみや怒りを, 苦しみや怒りの《内的》経験から何一つ借りてこなくとも, 彼の振るま

- いや表情、手つきのうちに知覚する。それは悲しみや怒りが、身体と意識とに分けることのできない世界内存在の変様であり、[...] さらにそうした変様は、他人の現象的身体において見られる他人の振るまいのうえに現れているからである」(PP 413f/2.222)
- 15) 「私は他人と行動の意味を介して交流するのだが、重要なのは、行動から構造へ、すなわち、他人の言葉やさらには行動の下へと、それらが生み出される領域へと到達しなければならないということである」(SC 239/330)。また、メルロ=ポンティはのちに、構造という概念は心理学者たちに使われ始めた当初は「知覚野の布置、すなわち諸々の力線によって分節され、あらゆる現象がそれから己の局所的価値を得てくるような全体性」という「明確な意味」をもっていたと述べている (S 188/1.188)。
- 16) 「[他人の理解においては] 問題が解決されたときにのみ、諸々の所与が遡及的に収斂するものとして現れ、一つの哲学の中心的モチーフが一旦了解されたときにのみ、哲学者のテクストに適切な記号の価値が与えられる」(PP 218/1.294)。
- 17) すでに触れたように、ソシールの『講義』は現在では編者たちの手で元テクストに大きく改竄が加えられていることが明らかになっており、そこに書かれた内容を素朴にソシール自身の考えとみなすわけにはいかない。しかし、そうした事実が判明し、ソシールの草稿や聴講者のノートが公開されたのはメルロ=ポンティの死後のことであり、メルロ=ポンティ自身のソシール理解は『講義』に依拠していたものと考えられる。それゆえ、我々はここではソシールの草稿やノートには触れず、『講義』から読み取りうる思想を括弧付きの「ソシールの思想」として扱うことにする。なお、『講義』の編纂にまつわる問題については丸山圭三郎『ソシールの思想』(岩波書店、1981年)を参照。
- 18) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Publié par Charles Bally et Albert Séchéhay, Édition critique préparée par Tulio de Mauro, Payot, 1972 [1916], p. 25, 29.
- 19) *Ibid.*, p. 31, 32, 45.
- 20) ソシールは、ラングの拘束性の原因としてラングの社会性を挙げるだけでは十分ではなく、さらにラングの歴史性を考慮に入れなければならないと述べている (*Ibid.*, p. 112.)。しかし、議論が煩雑になるのを避けるため、本論ではこの歴史性という論点には踏み込まない。
- 21) 立川健二『《力》の思想家ソシール』(書肆風の薔薇、1986年) 97-103頁を参照。
- 22) 「ラングとパロールを分けることによって、同時に次のものが分けられる。一、社会的なもの、個人的なもの。二、本質的なものと、付随的で多かれ少なかれ偶然的なもの」(Saussure, *op. cit.*, p. 30.)
- 23) ここでの目的はあくまで「社会的なもの」についての議論を踏まえた際に見えてくるメルロ=ポンティとソシールの言語観の差異を明らかにすることであるため、メルロ=ポンティの「誤読」の内実を一つ一つ検討することはしない。
- 24) これは丸山が「マルンベリーにならって」挙げている例である(丸山、前掲書、250-251頁)。
- 25) 「〈あられ〉という語は、私がそれを知っているときには、私が同定の総合によって認識する一つの対象などではなく、私の発声装置の或る使用、世界内存在としての私の身体の或る転調であり、その一般性は観念の一般性ではなく、行動を生み出す能力である限りでの私の身体が『了解する』行為のスタイルの一般性である。[...] 語の意味について言えば、私はそれを、あたかも道具の使用を学ぶかのように、それが或る状況のコンテクストの中で用いられるのを見ることによって学び取る」(PP 464f/2.295f)。
- 26) メルロ=ポンティはのちに、自分がソシールから学んだのはこの記号の示差性というアイデアに他ならないとまで述べるに至る (cf. S 63/1.58)。彼のこの発言がどこまで深い意図で発せられたものかについては議論の余地があるが、本論の考察によってこの発言に一定のリアリティを与えることはできるだろう。
- 27) イーザーが『行為としての読書』の中で行なっている分析は、こうしたプロセスのより具体的な証示となるだろう。フィールディングの『トム・ジョーンズ』において、オールワージーは最初「完全な人間」として記述される。そこで読者は自分が「完全な人間」という言葉の一般的意味として抱いているイメージをテクストへと投影する。だが、オールワージーは偽善者のプライフィル大尉に引き合わされるとその表向きだけの信心にあつという間に騙されてしまう。完全な人間が騙されるというのは一体どういうことなのか。そうやって多くの読者は、自分が「完全」という言葉を手がかりにテクストに投影していた意味を揺るがされる。そうした経験を積み重ねていくうち、読者は「完全」な人間であるオールワージーは実は「円満」と称される方が適切な性格をそなえた人物であったという新たな図式への転換を迫られるのである (Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens. Theorie ästhetischer Wirkung*, Wilhelm Fink Verlag, 1976, pp. 106f, 196ff.)。
- 28) 暗号解読の比喩はメルロ=ポンティ自身の講義録の中にも見られる (cf. MS 46/62)。暗号解読の核心は、与えられた個別のメッセージそのものから当該メッセージの内的構成原理としてのコードを引き出すことにある。
- 29) 「表現されるものそれ自体へと直接的ないし散文的に到達しており、存在するのはスタイルよりむしろ文法であるように我々に思われる場合、それは単に所作が習慣的で、我々による捉え直しが即座に行われ、その捉え直しが我々の日常的操作の手直しを少しも要求しないというだけ

のことである。反対に、その瞬間の言い回しの中にそれが許容する等価関係や置換関係の規則を、言語の中にそれ固有の鍵を、言連鎖の中に

その意味を我々が見出さなければならない場合、そうした場合こそが我々に言語の最も日常的な事実を理解させてくれるのだ」(PM 43/50)。

Reconsideration of Merleau-Ponty's interpretation of Saussure —— language as the social ——

Yasuyuki SANO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary The aim of this paper is to reveal a new aspect of Merleau-Ponty's theory of language and his interpretation of Saussure by reconsidering his reception of Saussure's linguistics within the framework of his thought of the "social" (*le social*). First, I focus on the *problématique* in Merleau-Ponty's middle period, in which he thought of language as an instance of the social (Chap. 1). He regarded the social neither as a thing nor as collective consciousness, which Durkheim distinguished rigidly from individual consciousness, but as an effect of intersubjectivity, defined as "identification with others by each individual." Then, by comparing his concept of society with that of language, I bring out his novel ideas about language, which determined his acceptance of Saussure (Chap. 2). Merleau-Ponty believed that language (*la langue*), as a "diacritical, oppositional, and negative" system, is embedded in the field of perception and fused with the attitude that the speaking subject (*sujet parlant*) assumes toward his situation. Thus, communication is not an exchange of messages according to a code that is shared by the language community, but a process of identification with the attitude of the speaker. This idea explains how people can understand the speech of others whose code is unknown and are able to establish a shared language code. Finally, I conclude that Merleau-Ponty's theory of language complements Saussure's linguistics from the perspective of communication.